

- ◆ この創作は9年前の3.11後、「人と人との関わりの大切さ」を感じたままにまとめたものです。最近、新型コロナウイルス感染症対応でサツバツとした状況を見るにつけ、ふと以前、書いた文章を引き出してみました。

特別寄稿「どろんこの靴」

土屋 常義

「なんて汚い足なんだ！ちゃんと拭いてから家に入りなさい。」ぞうきんを手渡ししながら、父は玄関に残された靴を見下ろしました。どろんこの靴、いったいどこを走り回ってきたのやら……。土曜日の夕暮れまで楽しく過ごした冒険を靴が物語っているようです。父は自分の子どもの頃の記憶と重なって、思わず口元がほころんでしまいました。

これは、今よりも少し前、昭和と言われた時代の「ある家庭」における出来事です。日常のありふれた光景ですが、じんわりと心が温かくなってきます。



○どろんこの靴は今？

便利で快適、そして物の豊かな時代の中で、子どもは家事や家業の手伝いをしなくてもすむような家庭が多くなりました。同時に、子どもたちが群れて外で遊ぶ姿もほとんど見られなくなりました。その結果、子どもたちが人間形成の過程で大切な、靴をどろんこにするような「自然体験」や「社会体験」の場がなくなり、「人と人との関わり方」や「他を思いやる心」など自然と身につけられる機会まで失われた感があります。

○そんな中での3.11

3月11日、午後2時46分、東日本大震災が発生しました。大きな揺れに加えて、太平洋沿いでは大津波が発生し、想像を絶する甚大な被害となったことは、まだ記憶に新しいところです。そんな発生から7ヶ月が過ぎた10月のとある日曜日、所用で被災地である宮城県名取市閑上地区を車で通る機会がありました。7ヶ月が過ぎた現在でも、田んぼには錆び付いた車、陸の上に横たわる釣り船、宅地であったと思われる集落は家の基礎コンクリートだけが残っていました。正直、その風景は見るだけで胸が締め付けられ、「何もできない」自分が悲しくなりました。しかし、その後、テレビの報道特集で見た被災地の方々は、決して悲しい表情ばかりではありませんでした。未来に向けて「夢」を語り、様々な方々との「出会い」や手助けを支えとし、復興に向けて「努力」している「賢く・逞しい姿」は、私に勇気さえ与えてくれました。そして、私たちに次のようなメッセージも発信してくれました。

- ・「同じ日本で起こっていることを、しっかり心で受け止めよう」
- ・「家族と一緒に過ごすことなど、当たり前の毎日を感謝できる人であろう」
- ・「他人ごとと思わないで、みんなで力を合わせて、乗り越えよう」
- ・「困っている人を思いやる心、どんなことにも立ち向かう心を持とう」と……。

○子どもたちに、心が温かくなる環境を……。

メディアが発達し、バーチャルな世界で架空の人物と対話するような若者も増えてきた現代社会に突然起こった3.11の東日本大震災。私たちは、この震災で多くのものを失いましたが、人として最も大切にしなければならない「人と人との関わりや、他を思いやる心」を呼び覚ましてもらったことも事実です。現代は、「どろんこの靴」を履く時代ではありません。しかし、私たち大人が、今の生活スタイルを見直し、子どもたちに意識的に関わっていくことで、あたり前の生活がこの上ない幸せであるということ、人と人が支え合う絆のある社会が、とても素晴らしいということ、共に体験し、伝えていかなければならないと思います。そうすることで、「どろんこの靴」と同じ、心が温かくなる環境づくりができると信じています。